

平成22年1月19日

卓話 松野 秀計

卓話「大陸横断世界旅行」パート6

旅行期間 1988年7月6日～1988年12月20日(168日間)

<渡航国>

パート1……中国、モンゴル、ロシア(旧ソ連)、ウクライナ(旧ソ連)、ハンガリー
チェコ(旧チェコスロバキア)、オーストリア、イタリア、パチカンシティ、ギリシャ
セルビアモンテネグロ(旧ユーゴスラビア)

パート2……ボスニアヘルツェゴビナ(旧ユーゴスラビア)、クロアチア(旧ユーゴ
スラビア)、スロベニア(旧ユーゴスラビア)、リヒテンシュタイン、スイス、ドイツ
オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ

パート3……ドイツ、フランス、モナコ、スペイン、ポルトガル

パート4……イギリス、モロッコ

パート5……番外編 中国(北京)

パート6……トルコ、イラン、エジプト

計 30カ国

136日目(11月18日)

今日は午後2時のフライトでスペイン(マドリード)からトルコのイスタンブールへ向かう。これからは中近東(イラン・シリア・ヨルダン)か中央アジア(パキスタン・インド・ネパール)方面へ行くため、荷物は極力少なくするため郵便局へ行きフランス・イギリス・モロッコで買った品物を日本へ船便で送った。

今回買った飛行機のチケットはユーゴスラビア航空の格安航空券で25,000円、マドリードからユーゴスラビアのザグレブを経由してイスタンブールへ行く。

安いチケットだし、あまりメジャーな航空会社ではないため、早めに空港へと向かった。

出発時間の午後2時、搭乗口の前でゲートが開くのを待っていても一向にその気配がない。客もまばらで、スタッフもいない。アナウンスがあったとしても英語とスペイン語ではお手上げだ。東欧の飛行機だし中国と同じ感覚で待つことにした。

1時間後、当たり前のようにスタッフがきて、普通に搭乗をし始めた。乗客も飛行機が遅れていたから少なかったわけではなく、まさに10人ほどしかいないのだ。離陸するとすぐ機内食のサービスが始まった。乗客とスチュワーデスの数が殆どかわらないという光景ははじめてで、こんな体験はなかなかできないと思う。機内食も十分に余っているせいか、スチュワーデスさんが気を利かせておかわりを持ってきてくれた。ザグレブまでは3時間のフライトである。機内食のサービスがあつという間に終わり、スチュワーデスはみんな暇を持て余している。思い切って声をかけ、みんなでトランプをしないか誘ってみると、なんと二つ返事でOK。5人ほど集まって大いに盛り上がった。

137日目(11月19日)

未明にイスタンブールに到着。

交通機関がなく市街地までタクシーがいくらかかるかもわからないので、飛行場で野宿することにした。

朝7時を過ぎても空港から市街地へ向かうリムジンバスが一向に運行しない。

そうこうすると、到着ゲートから日本人旅行者が出てきたので、声をかけて町まで行く車に便乗させてもらった。

イスタンブールには日本人が集まる「モラ」という有名な安宿ある。

早速チェックインの手続きをして前金を払う。3人部屋のドミトリーで一泊400円。

この価格は非常にありがたい。

手続きをしていたら急に背中を叩かれ、振り返ると見たことある顔が。

6月下旬、中国の最西端にあるシルクロードの町カシュガルでカシミール高原へ行きバスの乗る彼を見送った。旅仲間の坪井さんが立っていた。

5か月ぶりの再会である。

彼は中国～カシミール～パキスタン～イラン～シリア～トルコの難コースを陸路でコツコツと来たとのことだ。

坪井さんの他にも、このホテルには世界を旅しているつわもの共が勢ぞろいしている。

このホテルの最大の魅力は世界中を旅行して集まった、旅行の裏情報がリビングにあるノートにびっしり書き込まれているのだ。

2年間の中国留学と5か月近いバックパッカー生活をしてきた私も、ここでは初心者レベル。

1年かけてインドからスズキのバイクで来てる人、南アフリカから2年かけて陸路でアフリカを縦断し、中近東を通りアジアへ向かう途中の人……。そんな人たちが入れ替わり立ち替わり集まってくる、凄いホテルである。

138日(11月20日)

今日は日曜日。

トプカピガレージのサンデーバザールへ行ってきた。

屋台の床屋で髪をバツサリ切り、僻地旅行へ向けての準備を着々と進める。

アフリカの温暖地域から来た者にとって、トルコの寒さはこたえる。早速バザーで肘のところが破れた革ジャンを150円で購入した。

海沿いでは、水揚げされたばかりのサバをフライにして販売している。

パンにはさんでとれとれのフィッシュバーガーが1人前100円。ものすごくうまい！

141日(11月22日)

早朝から長距離バスでトルコの南西部にある観光地パムッカレへ向かう。

スペインのマドリードの安宿で一緒だった広瀬さんと40日ぶりに再会。とても気の合う人で、この後最後まで彼と一緒に旅を続けることになる。

パムッカレはこの旅行の最重要目的地である。

小学校の高学年～中学にかけて、爆発的に人気のあったTV番組「なるほど・ザ・ワールド」で取り上げられた場所で、子供のころから絶対行ってみたいところベスト5のひとつである。

ちなみに当時行きたかったベスト5は、1位「南米のガラパゴス諸島」、2位「トルコのパムッカレ」、3位「イタリアローマのトレビの泉」、4位「ケニアのサファリツアー」、5位「イースター島」

パムッカレは想像通りの素晴らしい景色で、真っ白で段々畑のようになった石灰石の丘に頂上から温泉が流れだし、湯気がたっている。

夕陽にとのコントラストはとても感動的だ。

146日目(11月27日)

朝、大雪の降る中イランとの国境の手前の町ドウバヤジットからバスで国境へむかう。

目の前にはおわん形の大きな山が目に入った。ノアの箱舟がたどり着いた聖地アララト山である。聖なる山を横目に、徒歩でイランの国境事務所へと向かった。

イランイラク戦争のさなかであるため、入国審査は非常に厳重で、リュックの中のものひとつひとつをチェックされ、また持参しているお金にはすべての通し番号のゴム印が押される。

通し番号が押された紙幣は、出国時に照らし合わされ、闇でお金が出ていないかをチェックするのである。

イランイラク戦争の実情はイラン・アメリカ戦争であり、米ドルやアメリカ製品についての制限が特にされていて、闇ルートでの換金率は15～18倍である。

闇市では通し番号があつてはいけないため、通関で見つからないよう、いろんなところに隠し入国する。

- ・煙草の葉を出し、お札を丸めて入れる。
- ・靴の中敷きの裏側を薄く切りスペースを作る。(これは、長時間歩くためお札が破れる可能性が高い。)
- ・ベルトの留め金を外し、ベルトの中に入れる。
イスタンブールのホテル・オラで事前に情報を入手してあつたので、動揺せずやり過ごすことができた。

147日目(11月28日)

イランの首都テヘランに着く。

まずは闇市へ行き、隠して持ち込んだ米ドルを交換する。

換金レートは20倍に上がっていた。

300ドル(1ドル=133円)を交換。4万円がいきなり80万円に早変わり！

早速、町の中心にある高級ホテル「インターコンチネンタルホテル」にチェックイン。

夜はフランス料理、キャビアも食べ放題。

長きにわたる貧乏旅行で押さえつけられていた欲求がここで一気に爆発した。

149日(11月30日)

バスで砂漠の中の道を走る事4時間、イランの第2の都市、イスファハーンに到着。

細かいブルーのタイルで出来たモスクは、かつて栄えた歴史を感じさせる。

イスファハーンは銀細工の有名な町である。

日本人のセンスにはアラビアンチック細工は今一だが、闇で交換したお金を使い切らないといけないうので、とにかく買いまくる。

153日(12月4日)

エジプトを旅行してきた人から、エジプトは最高。特にアブシンベルは絶品だったよと話を聞き、パキスタン～インド～ネパール～中国へ戻るユーラシア大陸一周コースをやめ、ルート反転しエジプトを目指すことにした。

大量に買い込んだ工芸品やペルシャ絨毯を両手に抱え、1週間前に通った道をトルコへ向けて戻る。

入国が厳しい分、出国は簡単と聞いていたが、ここに大きな落とし穴がまっていた。

高級な銀細工とペルシャ絨毯は、なんと！国外持ち出しは禁止となっているではないか！

50万円ちかく買い込んだ品々のすべてが没収となってしまった。
「悪銭身に付かず」、あぶく銭はその場で使い切るといふ鉄則は世界基準であった。

157日(12月7日)

今日は21歳の誕生日。
イスタンブールのホテル・モラで旅仲間10人が自炊してパーティを開いてくれた。
みんなで食料市場に買出しに行き一人一品を披露することに。
私は得意料理のハンバーグを作る事にした。
ホテル・モラのもう一つの良いところは、自炊設備が完備されており、長期滞在者や貧乏旅行者にはとてもありがたい。
19時から自分の作った料理や飲み物を持ちより、リビングでパーティが始まる。
みんなの驚異的な体験談をネタに深夜まで宴会は盛り上がった。

158日(12月8日)

二日酔いの中空港へむかう。
ディスカウントチケットでエジプトへ行くが、座席の予約が取れていないため、チェックインカウンターの前でキャンセル待ちの座席を待つ。運よく席が取れ、一路エジプトへ。エジプト入国にはビザが必要だが、裏情報によるとカイロ空港で入国する前にビザカウンターがあり簡単に取る事ができるらしい。
ダメもとで行ってみると、情報通り空港で簡単に取る事ができた。10ドル。
こういう場合もしだめだったら、どうなるんだろう??
なにはともあれ無事エジプトに入国。30カ国目である。
現在の所持金は日本円120,000円、米ドル71ドル、その他各国の小銭をあわせても合計130,000円となった。

159日(12月9日)

ピラミッドは早朝が良いといわれ、夜のうちにピラミッドのある町ギザへ来た。
あまりの安宿でノミが大量にいて、殆ど一睡もできない。
貴重品と寝袋を持って外の公園で寝ることに。モロッコでは満点の星空であったが、同じアフリカ北部なのにカイロの空は廃棄ガスで真っ白だ。

160日(12月10日)

まだ暗がりの中、ピラミッドへむかう。
警備がない朝方のすきを狙い、ピラミッド登頂に挑戦。ひとつの石が1m以上あるので、登るには大変。30段くらい登ったところで日ノ出となった。
幻想的な雰囲気かとおもいきや、すぐ近くには小汚い町が隣接しているので、思い

描いたピラミッドとは全然違っていた。

世界各国あるいてきたが、実物より映像や写真のほうがよいのはピラミッドくらいなものだ。日ノ出から5分もしないうちに警備員に見つかる。警笛が鳴り響き、3人警備員が下で叫んでいる。観光客も増えてきて大ごとになりそうだったので、途中であきらめ降りることにした。

当然のことながら、警備室に連れて行かれこっぴどく叱られた。

事前情報で、バクシーシ(裏銭)を握らせれば収まるらしいと聞いていたので、リーダーらしき人に20リラ(1000円)残りの2人に10リラ(500円)ずつ渡し無罪放免となった。